

# トカラ語 B の『出家功德経』写本断片について

萩原 裕敏

キーワード: トカラ仏教 『出家功德経』 Archaic Tocharian B

## 要旨

本稿では、ベルリン所蔵のトカラ語 B 断片中、文字特徴及び写本のフォーマットによって同一写本に属すると考えられる断片群 46 点を扱う。筆者の研究によれば、これらの断片の内、写本における位置や別の断片と直接接合或いは直接接合はしないものの、同一の folio に属するなどといったように他断片との関係が明らかになったものが、合計 11 点存在している。これらの断片は文字学的には Standard と称されるブラーフミー文字の類型に分類されるが、言語学的には明らかに Archaic Tocharian B の特徴を示していることから、原本となった写本は古層に属していたが、後代に改めて書写されたものであると推定される。また、同一の folio に属する事が明らかとなった THT1305 + THT1324.frg.a が漢訳仏典中のみ伝わっている『出家功德経』に比定されたが、この仏典はこれまでトカラ語文献中には知られていなかったものであり、トカラ仏教の古層でどのような仏典が翻訳されたかという点を窺う手がかりを提供する。なお、他の断片については現時点では原典の比定に至っていないため、この写本の最初の仏典が『出家功德経』であることから、これらの断片を含む当該写本を、本稿では便宜的に『出家功德経』写本」と称する。

## 1. 導入

各国に所蔵されているトカラ語断片は約八千点程度に上るとされているが、これらの断片は本来個別に存在していたのではなく、同一の写本に属していたと推定される断片が少なからず存在している事が明らかにされている。個別の断片の原典を比定し、それによって言語学的分析に利用可能なコーパスを作成していく作業は、文献言語の言語学的研究には必要不可欠であるが、トカラ語文献は残された資料が概ね断片である事、また少数の例外を除いて原典を同じくする複数の写本が存在し、諸写本を利用した校定作業によって特定の文献を再建するといった事が困難であるという事情から、言語学的研究、とりわけ共時的研究に必要なコーパスが十分に得られない場合がほとんどである。

筆者はこのような状況に鑑みて、同一写本に属すると推定される断片を網羅的に整理し、そこから得られる資料を基に言語学的研究に必要なコーパスを作成する作業を近年行っている。その成果の一部については、既に萩原 (2012) で公表した。本稿では、同じくベルリン所蔵のトカラ語 B 断片中、文字特徴及び写本のフォーマットから同一写本に属すると考えられる断片群 46 点を扱う。筆者の研究によれば、これらの断片の内、写本における位置や別の断片と直接接合或いは直接接合はしないものの、同一の folio に属するなどといった

ように他断片との関係が明らかになったものが、合計 11 点存在している。基本的にこれらの断片は文字学的には Standard と称されるブラーフミー文字に分類されるが、言語学的には明らかに Archaic Tocharian B の特徴を示しているため、原本となった写本は本来トカラ語 B 仏典の古層に属しており、現存する写本は当該仏典の成立よりも後の時代に書写されたものであると推定される<sup>1</sup>。

また、同一の folio に属する事が明らかとなった THT1305 + THT1324.frg.a が漢訳仏典中のみ伝わっている『出家功德経』に比定されたが、この仏典はこれまでトカラ語文献中には知られていなかったものであり、所謂トカラ仏教の古層でどのような仏典が翻訳されたかという点を窺う手がかりを提供する。なお、他の断片については現時点では原典の比定に至っていないため、この写本の最初の仏典が『出家功德経』であることから、本稿では便宜的にこれらの断片を含む写本を『『出家功德経』写本』と称する。この写本の再建を通して、当該写本に反映される言語特徴についても検討する。

## 2. トカラ語 B の『『出家功德経』写本』について

本稿で扱う断片は、文字類型及び写本のフォーマットを根拠としてベルリン所蔵断片中から筆者が同一写本に属すると判断した断片合計 46 点である。当該写本のフォーマットについては、この断片群に folio 全体のサイズを推定する事ができる程残存状態が良好な断片は残されていない。しかしながら、全体が韻文で書かれている蓋然性が高い事が残存部分から推定されるだけでなく、特に同一 folio の左右の端に相当する事が内容から判断できる THT1305 + 1324.frg.a の韻律を確定する事ができるため、この二断片に基づいて folio のサイズを算定すると、断片毎に若干の相違は見られるものの、大体横 23.5cm・縦 7.2cm 程度であったと推定される。

筆者が同一写本に属すると判断した根拠とした文字特徴の内、特に重要なものは、<ñā>・<ya>・<ṣa>・<10>・<40>といった akṣara であり、これらは他の断片にはあまり見られない形状を示している。また、この写本を書写した者には Fremdzeichen の使用方法にも特徴が見られる。即ち、母音として /a/ を有する一般の akṣara とは異なり、トカラ語には母音 /a/ を有する Fremdzeichen と称される akṣara が存在しているが、この akṣara には母音記号の <ä> を改めて付加する必要がないにも拘わらず、本写本では Fremdzeichen に母音記号の <ä> が附される例が 12 例見られた。このような <ä> の付加は全ての Fremdzeichen の用例に適用されるものではないが、本写本の特徴の一つと見做す事ができる。さらに、罫線が引かれている断片も多く、各断片の間に若干の相違は見られるが、行間は 0.8~1.3cm、また folio の左端

<sup>1</sup> 現在トカラ語文献学では、トカラ語文献が言語特徴及び文字特徴の両面から、それぞれ三つの段階に分類される事が明らかになっている。即ち、言語特徴の面からは、Archaic Tocharian B (4-6 世紀)、Classical Tocharian B (5-6 世紀)、Late Tocharian B (7 世紀以降) に、一方文字特徴からは Archaic (4-6 世紀)、Standard, Late に分類される。この二つの分類の内、言語特徴からの分類については Peyrot (2008: 204-206) を、文字特徴に基づく分類については Malzahn (2007) を参照されたい。なお、この二つの分類が年代的に同じ時代を反映するものであるか否かについては、今後も検討が必要である。この点については、本稿脚注 14 も参照されたい。

から紐穴までは4.6~4.9cmとなっており、概ね同様のフォーマットである事が窺える。

言語特徴については、当該写本中の THT1324.frg.a が arch.-I に、また THT1228 が arch.-II に分類される点が Peyrot (2008: 223) で指摘されているが<sup>2</sup>、これらの断片が同一写本に属する点から考えて、この写本には Archaic Tocharian B が反映されていると見做す事ができる。なお、この点については第八節で改めて検討する。また、写本の文字類型は一部の例外を除き<sup>3</sup>、Malzahn (2007) における Standard に分類される。全ての断片が出土地点の記載を残しているわけではないが、記載が見られる断片は全て Kizil を指示している事から、Kizil が発見場所として考えられる。この推定は、Archaic Tocharian B によるトカラ語 B 断片の多くが Kizil で発見されている事実と矛盾しない。筆者が当該写本に属すると見做した断片を出土地点の記載と共にまとめると、以下のようになる。

「『出家功德経』写本」リスト

THT: 1171

THT: 1202a, c, e, g, i, 1203i, 1205i, 1210, 1213 [T III MQ 49], 1215a, b, c [T III MQ 69], d, 1216, 1224, 1228, 1242b, 1266, 1275, 1276, 1278, 1296 [T III MQR]

THT: 1305, 1324a, 1324b [T III MQ69], 1340d [T III MQ49], 1394(a), g, h, r, s, u, v, bb, hh, 1399q, r, aa, ee, hh, uu, ww

THT: 1612

THT: 2183

THT: 3195

これらの断片群の内、直接接合或いは直接接合はしないものの、同一 folio に属する事が内容から明らかなもの及び葉数が残されているものも合わせて、写本中の位置付けが再建できた断片は以下のものである。なお、以下のリストに挙げる断片の接合については、これまでトカラ語文献学では指摘された事がない。

[写本再建]

THT: 1305 + 1324a {folio 2} 『出家功德経』

1278 {folio 5} 『出家功德経』

1215c + 1324b {folio 55}

1171 {folio 56(?)}

1213 + 1224

1296 + 1399hh + 1612

<sup>2</sup> 以下の第七節で言及するように、この断片は arch.-I に分類される可能性も排除されない。

<sup>3</sup> THT1224a1, b2 に見られる <ya> 及び THT1213a4, b4, 5 に在証される <ma> は Common Archaic の字形を示しているが、全体的に見ればこれらは例外的と言える。これが当該写本の原本から書写の際に紛れ込んだものか、或いは書写した人物個人に帰するものであるかについては判断する事ができない。

この写本について、THT1215c + 1324b の葉数が<55>であり、且つこの断片に直接続く folio と推定される THT1171 が写本の最終葉ではないと見られる点から、当該写本は 57 葉以上で構成されていた事が推定される。以下では、写本中での位置づけが判明した断片を検討した後、残りの断片の転写を紹介する。

### 3: 『出家功德経』断片

本仏典に比定される断片は THT1305 + 1324.frg.a 及び THT1278 である。この二つの folio には葉数が記載されており、それぞれ<2>及び<5>となっている。本仏典は漢訳仏典にのみ見られ、THT1305 + 1324.frg.a から再建される一葉に含まれる分量と漢訳仏典との対応から、THT1278 も本仏典に属するものと判断した。

#### 3-1: THT1305 + 1324.frg.a

##### 3-1-1: 転写と和訳<sup>4</sup>

この二断片の内 THT1324.frg.a が folio の左端に属し、THT1305 が右端に相当する点は残存部分の形状から明らかであるが、公開されている写真では両断片共に表裏が反対である。また、前者は folio の葉数を留めており、この記載から当該の folio はこの写本の第二目目であった事が窺える。ここから、本写本の最初の仏典が本仏典であった点及び本写本が複数の仏典を集成した編纂物であった点を確認できる。THT1305 及び THT1324.frg.a の断片は直接接合せず、中間に欠落部分が存在していた事は残存部分から知られるが、残存部分の内 THT1305 + 1324.frg.a.4-5 が第九 strophe の最初の pāda を全て残しており、この部分の音節数が 15 音節である点、また最初の pāda に 15 音節を有するものは 4 行×15 音節という韻律以外には知られていない点を根拠に、この断片の韻律は 4 行×15 音節であったと推定される<sup>5</sup>。この推定に基づけば、両断片間の欠落は最も少ない部分で 5 音節であった事が窺えるだけでなく、当該の folio に残存している部分は strophe 7c-13b であった事も推定される。以下の転写は、推定される韻律に基づいて両断片間の欠落している音節数を補ったものである。なお、韻文の再建については後に扱う。

[Size: THT1324.frg.a = w: 11.6; h: 4.6cm; THT1305 = w: 9.1; h: 7.2cm]

a

- 1 {----(‡)------(‡)--} [ā]nande lāklessu pāklyauṣ taṅwā<sup>[1]</sup>  
 2 (ssu) {--(‡)------(7)---} [t]rā tve skwameṃ yśelmeṣṣe ostmeṃ mā

<sup>4</sup> 以下の転写では下記の転写方式を採用する。

[ ]: 破損による読みの不確定な箇所

( ): 筆者によって推定された箇所

///: 写本の破損箇所

=: sandhi

--: 破損により判読不能な akṣara

∴: akṣara の欠けている子音若しくは母音

{ }: 断片の破損による欠落

∴: akṣara 数不明の欠落部分 (第六節)

<sup>5</sup> トカラ語の韻律については、Stumpf (1971: 71-72)・Thomas (1983: 272-276)・Pinault (2008: 397-409) を参照。

- 3 *l̥a[n]t(o)*<sup>[2]</sup> † *m. .l.* O {-----} *ñā* † *poysintse cpī su reki empremtse pū-*  
 4 *warmpa tāstra* O *mā an. .l. .[y]. [w]. .[k].* {-----} (*anai*)*śai* 8 *te keklyauşormem māka*  
*laklessu*  
 5 *tāka su mcuške* † *wārpāte wātkāl lantsi ostame(m)* {-----} (†) [*l̥na*]*skau tsa pi yşelmeşşe*  
*[s̥a]k\lakau şamññem*  
 6 *ās yāmu* † *şuktañce kauno lanu ostame(m) wārpā* {--- (9) ---} (*pa*)*[r]sk[au] lac su ostmem*  
*pūdñākceşc*<sup>[3]</sup> *şamā[n]e*
- b
- 1 *tākā* † *kau(m)* *yāşi śaśāyormem sruka sū papāşşu [a](cār<sub>1</sub> †)* {-----} *şamññemmp* = *ā[nande]*  
*pūdñākte preksa* † *[v](t̄)[r](a)-*  
 2 *sene şamāne srukormem ette temsate 10 tu* {-----} [*ññ*](*e*)*[m] tarķarwamtş\newe yukşeñcai*  
 † *karavīr<sub>1</sub>*  
 3 *lwā ñākcyana ke-* O *runta ş(.).e .ā r.o r[ş]a* {-(†)-----} (*tā*)*[r]kaucai*<sup>[4]</sup> *okt yakne klenemta*  
*weksa* † *ñā-*  
 4 *k[t]em[ts]* (*ñā*)*[k](t)e .o*<sup>[5]</sup> {----- (11) ---} [*k*]. *llesa*<sup>[6]</sup> *pgrsko<sub>u</sub>*<sup>[7]</sup> *su ānanda nraisa*  
*pgrskau*  
 5 (†) {----- (†) -----} (*y*)*[ā](m)[o]rmem mā walke şañ\yāmors* = *āstrem*  
 † *ştwe-*  
 6 (*r*). {----- (12) -----} *ñākcye su wārpātrā omte* † *ce<sub>[u]</sub>*

[注釈]

- (1): 文脈から *tānkwassu* ‘dear, beloved’の呼称である *tānwā(ssu)*が推定される。この部分は、*Ānanda* が *Virasena* に仏陀の言葉を伝える部分であると考えられる。
- (2): 文脈からみて、この語形は語根 *lāt-* ‘to go out’の接続法・二人称単数・能動態 *lānt* (Classical Toch.B: *lant*) に、韻律で要求される音節数を満たすための所謂“bewegliche -o”が附された形式である。なお、この在証例は Peyrot (2013: 445 fn.41) には指摘されていない。
- (3): この語の三番目の *akşara* の基字は <kt> が期待されるが、明らかに <kca> と書かれている。
- (4): この部分を *rkau cai* と分割し、前者を動詞の過去分詞・男性単数主格、後者を代名詞・複数主格とする理解もあり得るが、筆者はこの箇所が漢訳『出家功德経』「以大梵音，勝出雷鼓迦陵頻伽衆妙音聲，以八種音」(T.16, no.707, 814a11-12) に対応する事を根拠として、この語が後続する *wek* ‘voice’を修飾若しくはそれと同格の語である語と推定し、トカラ語 B: *tārkauca* ‘one who releases’の単数斜格(*tā*)*rkaucai* を再建する。なお、先行する b2 にもこのような語が見られる事は、この推定を支持しよう。
- (5): ここには(*p*)*o(yśi)* ‘Buddha’が推定されるかも知れない。
- (6): 『出家功德経』「畏於生死、地獄苦故」(T.16, no. 707, 814a13) に対応する事から、この部分には「死」を意味する(*sru*)*[k](e)llesa* 或いは(*sru*)*[k](a)llesa* が推定される。
- (7): この語形については Malzahn (2010: 711) を参照。

[和訳]

a

- 1 ... 苦しみを抱きつつ *Ānanda* は(言いました)。「愛しき者よ。聞きなさい。...
- 2 ... あなたが欲望の幸福を離れ出家しないならば、...
- 3 ... この仏陀による言葉は真実であり、
- 4 炎にも比較される。... しない<sup>[1]</sup> ... 良く(考えなさい)。{8} この事を聞き、
- 5 王子は非常に苦しみを抱いた。彼は出家する事を決然と受け入れました。... 私は欲望の幸福を享受し、家族に別れを告げて<sup>[2]</sup>
- 6 出家するつもりです。私は七日目に出家します。私は(出家する事を)受け入れます<sup>[3]</sup>。彼は恐れていたため仏陀の下へと出家し、

b

- 1 僧侶になりました。一日一夜生きてから、戒を守って亡くなりました。... *Ānanda* は(彼の)家族と共に仏陀に尋ねました。
- 2 僧侶の *Vīrasena* は亡くなってから、生まれ変わったのでしょうか。{10} ... の雲の音・キョウチクトウ<sup>[4]</sup>・
- 3 動物を打ち破る天界の鼓を ... する事によって ... を放つ八種類に響く声で
- 4 神々の神である(仏陀)は ... *Ānanda* よ、彼は死を恐れ、地獄を恐れ ...
- 5 ... を行い、間もなく自らの清浄なる行いによって、四つの ...
- 6 ... 彼はそこで神の ... を享受するだろう。この ...

[注釈]

- (1): この箇所は断片が破損しており文脈を確定できないが、和訳では最初の *mā* を否定辞として解釈した。ただし、後続する部分に *[w](ās)[k](atar)* と語根 *wāsk-* ‘to move, have motion’ の接続法・二人称単数を再建できるかも知れない。
- (2): この部分は Peyrot (2013: 658) で英訳されているが、上で示した筆者の解釈とは大きく異なっている。即ち、Peyrot はこの箇所に現れる *ās* を *āśce* ‘head’ の単数斜格 *āśc* と見做しており<sup>6</sup>、この解釈はこの断片を《*Garbhāvākraṅtisūtra*》とする比定に由来していると思われるが、次節で検討するように、この比定は誤りであり、実際は『出家功德経』に比定される。また、言語学的に見て、トカラ語 B: *āśce* ‘head’ の単数斜格である *āśc* が *ās* として現れるのは、Peyrot (op.cit.: 70-71) に言及されるように Late Tocharian B の特徴であり、Archaic Tocharian B と見做されている当該断片にこのような語形が現れる事は言語学的観点からも支持され難い。荻原 (2012: 142) で検討したように、*āśce* ‘head’ の単数斜格として解釈できない *ās* は THT1556a1 にも *ās yaṣṣāte* という表現で確認され、筆者はこの表現を「暇乞いをした」と解釈しておいた。THT1305 + 1324.frg.a にもこの語が現れる事実は、Archaic Tocharian B の段階で既にこの語が存在していた事を示しているだけで

<sup>6</sup> Peyrot は同じ箇所でも *yāmu* を語根 *yām-* ‘to do’ の過去分詞・男性単数主格と理解しているが、漢訳との対応及び前後の文脈から見て、接続法・一人称単数・能動態とすべきである。なお、この部分の韻律も不明としているが、両断片の接合によって韻律が確定できる点については、先に言及した。

なく、さらにこの語が *āsce* ‘head’ の単数斜格とは異なる別の語として解釈されるべきとする筆者の解釈を支持する。この部分と『出家功德経』「我當出家，定且聽更六日受樂。第七日中，我辭家眷屬，定必出家。」(T.16, no. 707, 814a5-6) との対応により、*ās yām* が「別れる、別れを告げる」と解釈されることから、この語は「別れ」といった意味で解釈する事ができよう<sup>7</sup>。なお、*ās yām* はパリ所蔵の世俗文書断片 Cp.37 + 36.66 (= Cp.36.11) にも在証される<sup>8</sup>。

- (3): Peyrot (op.cit.) では *wārpā(te)* と三人称単数を推定するが、筆者は *wārpā(mai lantsi)* と一人称単数を推定し、主人公の *Virasena* の発言であると理解した。
- (4): Skt. *karavīra-* ‘Oleander (SWTF I: 23a)’ の借用語である。これまでは、この語から派生した形容詞 *karavīrāṣṣe\** のみが知られていた。Adams (2013: 149) は、この形容詞の語幹として推定される *\*karavīr* は在証されていないと述べるが、誤りである。なお、この語に対応する部分は漢訳『出家功德経』には見られない。

### 3-1-2: 内容比定

前節で転写と和訳を紹介した THT1305 + 1324.frg.a は、筆写の調査によれば漢訳『出家功德経』(T.16, no. 707, 813c8-815a26) に比定される<sup>9</sup>。以下では、トカラ語断片で語られる内容を含む部分のみを引用し、断片の理解に資する箇所には下線を付しておく。

#### 『出家功德経』

「如是我聞。一時佛在毘舍離國。食時到，入城乞食。時毘舍離城中，有一梨車，名鞞羅羨那(秦言勇軍)。譬如天與諸天女共相娛樂，時此王子與諸婬女在閣上共相娛樂，耽於色欲亦復如是。爾時世尊以一切智聞彼樂音，告阿難言，我知此人、貪五欲樂者、不久命終。却後七日，當捨如是眷屬快樂，決定當死。阿難。如此人若當不捨欲樂，不出家者，命終或能墮於地獄。爾時阿難頂奉佛教，欲利益此王子故，次至其舍。爾時王子聞阿難在外，即出奉見，以敬念故，請阿難入坐。坐已，未久，爾時王子起恭敬心，白阿難言，善哉。好親友來，今

<sup>7</sup> この語の語源については明らかにし得ないが、トカラ語Bの *āk-* ‘to lead’ と関連づける事ができるかも知れない。なお、この語は *ās pyāk-* ‘to depress, distress (Adams 2013: 439)’ という成句に在証される *ās* と同じものと見做す事ができるように思われる。即ち、この成句中の *ās* も従来 *āsce* ‘head’ の単数斜格と混同されてきたが、arch.-class. に分類される B220 にも在証されるため (Peyrot 2008: 220)、やはり *āsce* ‘head’ とは別の語と解釈すべきであろう。Peyrot (2008: 229) は IOL Toch 40 を class. に分類するが、この *ās* を *āsce* ‘head’ の Late Tocharian B の語形と認識しているため、この断片の分類に際して「but *ās*」と late の特徴も示すような形となっている。この語を *āsce* ‘head’ とは異なる別の語と認定すれば、このような点は解消される。

<sup>8</sup> この例については Ching (2010: 205, 214, 222) を参照。ただし、当該箇所而言及されている筆者の推定に基づく解釈は、本稿で指摘したように訂正されるべきであり、且つ筆者の解釈に従って Peyrot (2008: 71) が指摘するこの用例は削除される。

<sup>9</sup> この仏典は『法苑珠林』巻22 (T.53, no. 2122, 450a20-b15) にも引用されている。また、ほとんど同一の類型に属する仏典として『増一阿含経』巻34「七日用品(五)」(T.02, no. 125, 739b10-740a24) を挙げる事ができるが、『出家功德経』が主人公を「王子」とするのに対して「長者」としており、この点において THT1305 + 1324.frg.a が『出家功德経』に一致する事を理由に、本稿では『出家功德経』に比定した。また、以下に示す通り、THT1305 + 1324.frg.a は『出家功德経』とかなりの部分において一致する。なお、『経律異相』巻19「毘羅斯那微善出家生天得道」(T.53, no. 2121, 101c12-102 a23) は『増一阿含経』よりの引用である。

正是時。我今見汝，踊躍歡喜。汝字歡喜，汝今當教，告我佛所教法，令我歡喜。爾時王子如是三請。阿難為欲作大利益，默然無言。王子又言。鞞陀呵牟尼大仙，利益一切眾生。有何嫌恨，默然無所說。不見少告。時第三師，持佛法藏、利世間者，慘然告言。汝今善聽。却後七日，汝當命終。汝若於此五欲樂中，不能覺悟，不出家者，命終或當墮地獄中。佛一切智人，正語正說，記汝如是。譬火燒物，終不虛發。汝諦思惟。時彼王子聞此語已，甚大憂怖，愁憤不樂，受阿難教。我當出家，定且聽更六日受樂。第七日中，我辭家眷屬，定必出家。阿難可之。第七日畏生死故，求佛出家，佛即聽之。一日一夜，修持淨戒，即便命終。燒香畢已，尊者阿難與其眷屬，往白佛言。世尊。此鞞羅羨那比丘，今已命終，神生何處。時佛、世尊、天人之師、一切智人，以大梵音，勝出雷鼓迦陵頻伽眾妙音聲，以八種音告阿難言。此鞞羅羨那比丘，畏於生死、地獄苦故，捨欲出家。一日一夜，持淨戒故，捨此世已，生四天王天，為北方天王毘沙門子，恣心受於五欲快樂。貪受五欲，與諸姝女共相娛樂，壽五百歲。」  
(T.16, no. 707, 813c11-814a17)

以上の対応関係により、THT1305 + 1324.frg.a が『出家功德經』に比定される事が窺える。なお、トカラ語 B 断片は欠落している部分があるものの残存部分から判断して、原典を比較的忠実に韻文によって綴ったものと言う事ができる。また、この仏典が散文ではなく、韻文で綴られている点も注目される。次節では韻律を利用して当該断片で語られている韻文の再建を試み、全体のどの程度が残存しているかという点を確認する。この作業によって、先の転写からは窺いにくい当該韻文の全体像が把握できよう。

### 3-1-3: 韻文の再建

本節では THT1305 + 1324.frg.a の韻文を再建する。これまでに知られているトカラ語 B の韻律から、当該断片で採用されている韻律は 4 行×15 音節であった事が推定される。この韻律を利用すれば、両断片間の欠落がどの程度であるかを推定する事ができるだけでなく、各韻文についても残存部分がどの程度であるかを確認する事が可能である。既に言及したが、当該断片には strophe 7c-13b が残存しており、本来この folio には strophe 7a-13b が与えられていた事が窺える。以下に、筆者が再建した当該断片の韻文を掲げる。

THT1305 + 1324.frg.a [4×15 (= 7/8 or 8/7)]: 7a-13b

```
{- - - - - - - - - - - - - - - -}
{- - - - - - - - - - - - - - - -}
{- -} [ā]nande lāklessu | pāklyauṣ tānwā(ssu) {- -}
{- - - - - - - - - - - - - - - -} {VII}
{- -} - [t]rā twe skwameṃ | yśelmeṣṣe ostmeṃ mā lā[n]t(o) ‡
m. .l. {- - - - - - - - - - - -} ña ‡
poyśintse cpī su reki | empreṃntse pūwarmpa tāṣṭrā
```



*mā an. .t. .[y]. [w]. .[k]. {- - - - -}* (*anai*)*sai* {VIII}  
*te keklyauşormem māka | lāklessu tāka su mcuşke ‡*  
*wārpāte wātkał lantsi | ostame(m) {- - - - -}*  
*[lna]skau tsa pi yselmeşşe | [sä]k lākau şamññem ās yāmu ‡*  
*şuktāñce kauno länu | ostāmem wārpā {- - -}* {IX}  
*{-} (pā)[r]sk[au] lāc su ostmem | pūdñākceśc şamā[n]e tākā ‡*  
*kau(m) yaşi şaşāyormem | sruka sū papāşşu [a](cār)*  
*{- - - - -} şāññemmp = ā[nande] pūdñākte preksa ‡*  
*[v](ī)[r](a)sene şamāne | srukormem ette temtsate {X}*  
*tu {- - - - -} [ññ](e)[m] | tārkarwañts newe yukşeñcai ‡*  
*karavīr lwā ñākcyana | kerunta ş(.)e .ā r.o r[s]a {-}*  
*{- - - -}* (tā)[r]kaucai | okt yakne klenemtä weksa ‡  
*ñāk[t]em[ts] (ñā)[k](t)e .o {- - - - - - - - - - -}* {XI}  
*{-} (sru)[k](e)llesa pārsko<sub>u</sub> | su ānanda nraisa pārskau (‡)*  
*{- - - - - - - - - - - - - - -}*  
*{- - - -}* (y)[ā](m)[o]rmem | mā walke şāñ yāmors = āstrem ‡  
*ştwe(r). {- - - - - - - - - - - - - - -}* {XII}  
*{- - - - - - - - -}* | ñākcye su wārpātrā ome ‡  
*ce<sub>uj</sub> {- - - - - - - - - - - - - - -}*

## 3-2: THT1278

この断片は folio の左端に相当し、葉数を含む部分のみが残っているため、五葉目である事がわかる。断片は内容を比定させるに十分な程残っていないが、残された葉数から、先に扱った THT1305 + 1324.frg.a と同様に『出家功德経』に属すると判断した。ただし、残存部分が僅かであるため、当該仏典における正確な位置付けについては明らかにし得ない。

[w: 6; h: 4.4cm]

a

4 *ś ce<sub>u</sub> w(ā)[n]tr(e) ///*5 *ñāsi totak ñās<sup>[1]</sup> ///*6 *tanmāstra şek şek su yña(ktem) ///*

b

1 *ññana krentaunamts\ snai ā(ke) ///*2 *ra solme weñi - ///*3 *ña - ///*

[注釈]

(1): 文脈が確定できないため、この部分は語の分け方が確実ではない。ここでは、暫定的に最初の語を動詞の不定詞として解釈した。

[和訳]

a

- |                          |                     |
|--------------------------|---------------------|
| 4 ... この事 ...            | 1 ... の善行の限りない ...  |
| 5 ... するために、それだけ私(?) ... | 2 ... 全て彼は語るだろう。... |
| 6 彼は常に天界に生まれる。...        | 3 [和訳不能]            |

4: 1215.frg.c + 1324.frg.b 及び THT1171

1215.frg.c + 1324.frg.b 及び THT1171 は、内容と韻文の番号から連続する folio と推定される断片である。この内、1215.frg.c + 1324.frg.b には folio の番号が残されている事から写本中の位置付けを知る事ができる。以下に触れるように、これらの断片の内容を確定するには至っていない。

4-1: 1215.frg.c + 1324.frg.b

THT1215.frg.c + 1324.frg.b の二断片は直接接合し folio の左端を残してはいるが、右端を欠いている。先に THT1305 + 1324.frg.a を利用して算定した folio のサイズを参考にすると、右端までは最短の部分で 5cm 程度となる。また、この folio の葉数は五十五葉目である事が、THT1324.frg.b 裏側の左端に記載されている数字によって知られる。一方、この folio の内容は THT1324.frg.b が漠然と《Garbhāvākṛāntisūtra》に比定されているが<sup>10</sup>、これまで対応部分など具体的な点については全く明らかにされていないだけでなく、現代語による訳文も提示されていない。現時点で、この断片が《Garbhāvākṛāntisūtra》に比定されるか否かを判断するだけの根拠を筆者は持たないが、以下の和訳を見る限り、否定的な見解を有さざるを得ない。仮にこの比定が正しいならば、対応するパラレルとの比較から、この部分が「脈」の生成を述べた部分以降に対応する可能性が指摘されるが<sup>11</sup>、この断片の内容については今後の研究に俟ちたい。なお、以下の転写では、欠落部分に相当する akṣara を補ってはいいるが、あくまで概算に過ぎず確定的なものではない点をお断りしておく。

[THT1215.frg.c + THT1324.frg.b = w: 18.3; h: 6.4cm]

a

- 1 {-----} - waṭṭa c .w. - {-----}
- 2 st. - {-----} [l](.)[e] w(i) kṛānt[e] - k(e)ktseñāntse ytari [ñke] {-----}
- 3 st[u]wāṣṣeñca<sup>[1]</sup> O {- -} .k. nṛā āyo[r] ra (2)8 tom wi kṛānte ytarimṣa y[n]e<sup>[2]</sup> {-----  
-}
- 4 nts wāntarwa smā- O ts[i]sa<sup>[3]</sup> ḡna ytārye satāstsy anās[t](s)isa [p]kā[r](sa) {-----  
-}
- 5 ne 29 śwātsi yoktsiṣṣe[m] k,se somo skwameṃ plyiye<sup>[4]</sup> śū(k)e .[o] {-----}

<sup>10</sup> Malzahn (2010: 996) を参照。

<sup>11</sup> 漢訳仏典には《Garbhāvākṛāntisūtra》に対応する仏典が三本見られるが、差し当たり『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷 11 (T.24, no. 1451, 254c25-) を参照されたい。なお、『道地經』類も類似の内容を含むが、仏陀が難陀に語るものではないため、ここでは数に入れていない。

- 6 *wī kante reṣṣam soyāṣṣam kektseñ po yke postam* [30] {-----}
- b
- 1 *no mīsa stwentārme<sup>[1]</sup> mīsāmem pitke āsta mrest[īw](e)* {-----}
- 2 *indrintaṃts weremṣcā pyutkaṣṣam pone kektsenne kālta(r) waṭ<sub>1</sub> .ts.* {-----}
- 3 *riṃnts to(m) wī kante † O 32 tarya kantemem škaska olypo ṣpa k<sub>ut</sub>. ka -* {-----}
- 4 *lpsa śtwāra k<sub>a</sub>- O (nte mī)[s]āṣ[s]ana po (t)o[m] (w)[ī] kante y[t]ariṃtsa pkārsa twe 3(3)* {-----}
- 5 *tu - ..[m] - {-----} s.. s[k]e ne .[e] - l[l]āskem<sup>[5]</sup> śśanmāskem<sup>[6]</sup> [ā] {-----}*
- 6 *.[i] {-----} .[ā] ki ma s(.e .(.).ā<sup>[7]</sup> [r].(.)[e] {-----}*

[注釈]

- (1): 当該断片に現れる *stwentārme* を Malzahn (2010: 996-997) は *tsuw-* ‘to stick to’ に由来する *tswentārme\** の誤写とするが、この断片には同じ語根から派生したと推定される形式がもう一例在証される事から、Adams (2013: 777-778) に指摘されるように語根 *stu-* を設定すべきであろう。なお、THT1215.frg.c + 1324.frg.b.a3 の *st[u]wāṣṣeñca* は Adams 及び Malzahn の両者とも指摘していないが、語根 *stu-* の使役形・現在能動分詞である。なお、この動詞は当該断片以外には知られていないため、暫定的に Adams の語義解釈に従う。
- (2): 語根 *i-* ‘to go’ の現在中動分詞 *yne(mane)* が推定されるかも知れない。
- (3): 後続する *satāstsy anās[ī](s)isa* がそれぞれ動詞の不定詞である事から、この語形も動詞の不定詞に通格の語尾が附されたものと考えるのが自然であり、実際 Adams (2013: 790) は *smā-* ‘to stand (?)’ の不定詞と解釈しているが、動詞の意味については確定できない。
- (4): この語は hapax であるため、語義を推定する事ができない。
- (5): 恐らく *kāl-* ‘to lead, bring’ の三人称単数・現在形 (*kāllāskem*) が推定される。
- (6): 新出語形であるが、語根 *sānm-* ‘to bind, establish’ の三人称単数・現在・能動形である。
- (7): ここには *māsk-* ‘to be’ の三人称単数・現在形 *mās(k)e(tr)ā* 或いは同複数形 *mās(k)e(ntr)ā* が再建されるかも知れない。

[和訳]

- a
- 1 ... 或いは ...
- 2 ... 二百 ... 体の道を今 ...
- 3 ... 固まらせる (?) ... 贈り物のように ... {28} この二百の道を通って進み (?) ...
- 4 ... の事物 ... するための道が一つ存在している (?)。これを呼吸するためのものと認識しなさい。 ...
- 5 ... {29} 食べ物・飲み物による一つの幸福から<sup>[1]</sup> ... 味 ...
- 6 ... 二百 ... 流れる。徐々に体全てを満足させる。 {30} ...
- b
- 1 ... それらの肉が固まる (?)。肉から唾液 (?)・骨・骨髓 ...

- 2 ... 感覚器官の香りへと変化し、体全てに留まる。或いは ...
- 3 ... のこれら二百 ... {32} 三百から六十を超える ...
- 4 ... によるものが四百、肉からなる二百全ての道を通るものと、あなたは認識しなさい。  
{33} ...
- 5 ... それ(?) ... それらは ... を導き、結びつける。...
- 6 [和訳不能]

[注釈]

(1): この部分の syntax は不明である。形容詞 *yoktsiṣṣe[m]* は男性複数斜格であるが、後続する *somo* は数詞 *se* ‘one’ の単数女性形であり gender が一致しないばかりか、それに続く *sakw* ‘happiness’ は単数において男性形として変化するため、数詞の *somo* とも一致しない。トカラ語 B 韻文では韻律の要求する音節数に合わせるため、形容詞と修飾する名詞の gender が一致しない現象が知られているが、この形容詞に関しては男性形・女性形の音節数は同一であるため、この推定は支持されない。

#### 4-2: THT1171

THT1171 は表裏五行ずつを残す断片である。ここでは、内容と韻文の番号から 1215.frg.c + 1324.frg.b に直接続く folio と判断した。筆者の判断が正しければ、公開されている THT1171 の写真は表裏が反対となる。

[w: 6.7; h: 6.6cm]

a

- 1 /// -- .la[k]l(e)ntaṣṣe sa ///
- 2 /// .[e] snai keṣ warpnatṛa<sup>[1]</sup> śak wi ///
- 3 /// [ʔ]<sup>[2]</sup> po ytari[nm]en auloñ indr[i] ///
- 4 /// [s]. ne śūke preñcanantso ytār(ints) ///
- 5 /// nkaṃ śak<sub>u</sub> lakle kau .o ///

b

- 1 /// - werem waṭ\ śū[ke] ///
- 2 /// (yo)[k]ts[i]ñe āyusa 40 satāṣṣa(m) ///
- 3 /// [l](.). na k[y](.)ā rsa wi kante ytār = yam<sup>[3]</sup> [tm](a)<sup>[4]</sup> ///
- 4 /// - [ś]k. na[m]maiñāna<sup>[5]</sup> tsāram y[t]. ///
- 5 /// - .i {--} - l.o rsa -[l] ///

[注釈]

- (1): 語根 *wārp-* ‘to enjoy’ の三人称単数・現在・中動態と判断されるが、このような語形は指摘された事がない。
- (2): この部分が数字の <7> ならば、同じく数字の <30> が先行していた推定される。

- (3): この部分は *ytāri yaṃ* の sandhi と考えられるが、*ytārye* ‘way, road’ の単数斜格 *ytāri* は数詞「二百」によって限定されていると理解されるため、名詞の数が合わない。この名詞の複数斜格 *ytariṃ* の誤写と考え、*ytariṃ yaṃ* と再建すべきではないだろうか。
- (4): 恐らく *tmāne* ‘ten thousand’ が推定される。
- (5): この部分の語の区切り方は不明であるが、最後の二音節 <sup>0</sup>-*nāna* は形容詞の女性複数・主格/斜格形(arch.-I)を想起させ、行末に推定される女性名詞 *ytārye* ‘way, road’ を限定していた可能性を指摘する事ができる。また、この語に続く *tsāraṃ* はこれまで指摘された事がないが、語根 *tsār-* ‘to be separated’ の三人称・接続法・能動態であると推定される。なお、この類に属する定動詞は三人称の単数・複数が同一形式を取るため、形態の上ではどちらか判断できないが、先行する語が先に述べたように形容詞の女性複数・主格/斜格形であるならば、動詞に後続する主語として *ytārye* ‘way, road’ の複数主格 *ytariñ* を推定し、三人称複数と考える事ができる。

[和訳]

a

- 1 ... 苦悩の ...
- 2 ... 彼は限りなく ... を享受します。十二 ...
- 3 ... {(3)7} 全ての道から、血管・感覚器官 ...
- 4 ... 味を持っている道の ...
- 5 ... 幸福と苦悩 ...

b

- 1 ... 香或いは味 ...
- 2 ... 飲み物の ... 与えられた ... {40} 彼は息を吐きます。...
- 3 ... 二百の道を行く。一万(?) ...
- 4 ... の道が分かれる。...
- 5 [和訳不能]

## 5: THT1213 + THT1224

THT1213 は folio の右端、THT1224 は左端に相当し、残された部分から同一 folio の両端に相当する事が窺えるが、両断片は直接接合せず、先に THT1305 + 1324.frg.a を利用して算定した folio のサイズを参考にすると、両断片の間の欠落は最短で 8cm 程度となる。THT1224 は folio の左端を完全に残しているが、葉数は見られない。断片を実見したところ、断片には磨滅した痕跡は確認できなかったため、元々葉数は書かれていなかったと推定されるが、folio の右端に相当する THT1213 に見られる韻文の番号から表裏が判断できる。当該 folio の内容は、現在までのところ比定には至っていない。ただし、folio の表と裏の韻文の番号は連続しておらず、裏面では別の韻文が異なる仏典を伝えていたものと推定される。欠落部分が多く、前後の文脈も不明なため、以下の和訳は試訳以外の何物でもない。なお、以

下の転写でも、両断片の間の欠落部分を概算によって推定した akṣara で補っている。

[THT1224 = w: 5.2; h: 7.3cm; THT1213 = w: 9.9; h: 7.4cm]

a

- 1 *yast[ā] k[e]kly(au)[s].* {-----} [mtso] 28 *akruna* – {--} (la-)
- 2 *laikauwa sarw[ān](a)* {-----} -- [a]kāl<sub>k</sub> tsānkau starca o-
- 3 *rotse lyulysa* O {-----} k. 29 *śle kka pain tākaṃ enestai ka ce wā-*
- 4 *ntre ente alyai* O {-----} [c](e) *reki klyauša kat(k)emane tāka sā<sub>u</sub> tumem*
- 5 *walo su po wer(tsy)ai* {-----} [ñ](a)[k]e *bhāryacintā* {----} *rmem pestā mcu-*
- 6 *ṣkaṃtse tā<sub>i</sub> l[ā](ntsoy).* {-----} [o]t [rā] *rve r(.)a* – {----} *yamaṣate*

b

- 1 *krāna<sup>[1]</sup> auloṃ* {-----} – *nta wantar[w](a)* {----} *no nuwā-*
- 2 *lñesa preke yai[n]mu* {-----} – *mā no pālso si* {--} -- [c](e)<sub>u</sub> laklesā<sup>[2]</sup> 2
- 3 *pepekoṣ ce<sub>u</sub>* O {-----} – *no antpi<sup>[3]</sup> ešne mā spā lako<sub>i</sub> pālsoṣṣi*
- 4 *no ešne maṅta tsa* O {-----} – *nārkaṣṣaṃ 3 yākne postam ślokaṅma su*
- 5 *rerittu wāci[tr].* {-----} ñ[a]kte *śaumo a .e – (..)e (y)[ā]-*
- 6 *nmāṣyem cai l.* {-----} [ññai] *keklyaušormem a* – {----}

[注釈]

(1): この語は hapax であり、語義を確定できないが、Adams(2013: 230)が '(nape of the) neck' と解釈する *krāñi(ye)*\* と関係づけ、この名詞は *krāna* に接尾辞 *-(i)ye* を附した形式と見做す事ができるように思われるが、当該断片の用例は十分な文脈が残されておらず、確かな事は言えない。

(2): この語形の通格語尾は *-sā* となっている事から、arch.-I に分類される。

(3): Classical Tocharian B の語形は *āntpi* であり、arch.-I の特徴を示している。

[和訳]

a

- 1 ... を聞き ... {28} 涙 ...
- 2 ... 洗われた顔 ... あなたに望みが生じた。
- 3 大きな ... {29} 足とともに隠れ(?)、もしこの事を
- 4 他の人々が(?) ... 彼はこの言葉を聞いた。彼は嬉しくなった。それから、
- 5 かの王は全ての従者 ... 今、*Bhāryacintā* は ... してから、王子と
- 6 女王の ... そこで ... 彼は ... をした。

b

- 1 ... 血管 ... 事物 ... また咆哮によって
- 2 時に達して ... 心 ... ない。... この苦しみにによって ... {2}
- 3 この熟した ... また、両目を彼は見る事ができない。しかし、心の

- 4 両目は ... そのように ... 彼は近づかない。{3} 方法に従って、彼は韻文を
- 5 作り、様々に ... 神、衆生 ...
- 6 彼らは獲得した。... を聞いてから ...

## 6: THT1296 + THT1399hh + THT1612

この三断片は同一 folio に属しており、THT1296 及び THT1612 はそれぞれ同一 folio の左端と右端に相当し、両断片間の欠落は最短で 5.5cm 程度と推定される。また、THT1399.frg.hh は両断片間に位置していたと推定されるが、正確な位置を特定する事は困難である。

これら三断片が同一 folio に属すると推定した根拠は、韻文の番号から当該 folio の表と判断される面の裏側に非常に小さい文字でトカラ語 B が書かれている点にある。文字が書かれる方向が同じであるため、公開されている写真からは窺う事が困難であるが、実際に断片を調査した際、筆者はこれらの小さな文字が folio の裏に相当する面に書き込まれているのではなく、この folio の表を構成する紙の裏側に書き込まれている事に気付いた。即ち、これらの文字は folio の裏を構成する紙が傷み、表側の紙の裏が露出している部分でのみ確認する事ができる。また、この点から当該 folio は一枚の紙の両面ではなく、二度漉きと称される方法によって作製された紙に書かれていた事が推定される。なお、筆者がベルリン所蔵のトカラ語文献を確認した限り、紙の裏側に文字が書かれている断片はこの三断片のみであった。

この写本のトカラ語 B が Archaic Tocharian B を示している点については既に言及したが、この裏に書き込まれた部分も Archaic Tocharian B である事が、解読可能な部分から確認できる。ただし、現在解読可能な部分は一部に過ぎず、全体として理解可能な解釈を与える事はできない。当該 folio の表側を構成する紙の裏に書かれている事から、この小字の部分は恐らく本来他人に読まれる事を目的としない部分であったと推定されるが、何の目的で書かれたのかという点については、全体の解釈が困難であるため明らかにし得ない。この部分については、科学的調査によって全体の解読が為される必要がある事を指摘しておく。

以下の転写では上述の各断片と同様に、欠落した部分を概算で補っているが、先に触れたように THT1399.frg.hh の位置は確定できないため、大凡のイメージを得るために、暫定的に THT1296 及び THT1612 の間に位置づけているに過ぎない点に注意されたい。

[THT1296 = w: 12.4; h: 6.3cm; THT1399.frg.hh = w: 3.3; h: 3.3cm; THT1612 = w: 5.4; h: 6.8cm]

a

- 1 *kartse yāmorsa mamāntau sã š no mā* {---} - {-----} - [t]. *k[au] ñäk(e) w(ai)-*
- 2 *pecceşşana kosimntsākā karkau ka şpa lkātrā [š]aişşe ñ[k]e* {---} - [e] {---} *orotse ste mā y[ā]-*
- 3 {---} - *ltsi tsīr = ai-* ○ *śaumyetš*<sup>[1]</sup> *śaul śaille mā .e* {---} 8 *allek [pā]* {---} - *(ai)śaumi*

*ñke auntsā-*

4 *nte lantsi śgṛ kre-* O *ntā yā[k](n)e .[e] -- {---} - śas[t]arn[t](a)<sup>[2]</sup> - {-} kr[e]ntamts*  
*tatāko[ś]*<sub>(1)</sub> -

5 *mākressoñc*<sup>[3]</sup> *lk[a]n[t](rā)<sup>[4]</sup> ñ[k]e {-----} - .[e] {-} l(.)em - r.*  
*skentra [ta]-*

6 {--} - .ā {-----} .(.)[i] tra -  
 b

1 {-----} - [kau] -

2 *tantsā yo - (n)ts*<sub>(1)</sub> - {-----} - {-} - {-----} ---- [all]. -

3 *sū ike ñke* O - *nt. m.* {-----} *my. [w]e .e* {-} ----

4 - [ānand](a) [twe] O *rekaunane epastye sū* {-} *w[e] su [ñ]ke* -- {-} ----

5 *[strā] ñ[ke] yukṣeñca k<sub>r</sub>se klanktsi [śa]ññ [au]ke<sup>[5]</sup> alyenkā[m]ts [w].* {-} - {-} ----  
 -

6 - .ai m. .śg - ñ[k]e lantuññe 10 - .e - {-----} - ke -

[注釈]

- (1): この箇所は二つの語が sandhi によって結ばれていると考えられる。トカラ語 B の sandhi によって、最初の語形は *tsīra\** 或いは *tsīre\** と推定されるが、詳細は不明である。
- (2): トカラ語 B の *sāstār* ‘teaching’ の複数形としては *śastar(n)ma* のみが知られ、*śastarnta* は知られていない。
- (3): この語は hapax であるため意味を確定できないが、接尾辞 *-ssu* によって派生された形容詞の男性複数・主格である。
- (4): 筆者の推定に誤りがなければ、a2: *lkātrā* に対してこの語形は arch-I の特徴を示しており、この写本を書写した者に Peyrot (2008: 33-39) で指摘された accent rule I に対する揺れが存在していた事となる。
- (5): この語も hapax であり、意味を確定できない。

[和訳]

a

- 1 善行を行うことによって取り除かれた。そして、それは ... 今、財産の
- 2 咳によって縛られて<sup>[1]</sup>、彼は人々を見る。今 ... は大きい。
- 3 ... ない。賢者達は生きる事ができる。... ない。{8} 他の ... 賢者達は今、
- 4 去り始めた。良い方法 ... 聖典 ... 善人達(?)によって彼等は ... となった。...
- 5 彼等は ... 見える。今 ...
- 6 [和訳不能]

b

- 1-2 [和訳不能]
- 3 その場所は今 ...



- 4 ... *Ānanda* よ。あなたは言葉に精通している。彼は ... 彼は今 ...  
 5 ... 今、疑いに打ち勝ち、自らの ... 他の人々の ...  
 6 ... 今、王位 ... {10} ...

[注釈]

(1): 「咳」と和訳した *kosimntsākā* は Adams (2013: 221-222) によって 'cough' と解釈されている *kosi\** の複数通格に particle の *kā* が附された形式であると考えられるが、この解釈では文脈に合わない。この語は B497a4, a6 に在証されるのみで、この用例も含めて、語義については再検討される必要がある。また、この語形では通格語尾が *-sa* ではなく *-sā* となっていることから、arch.-I の段階の語形として解釈される。

以下の当該 folio の表側裏面の転写では、三断片相互の間にもどの程度の欠落が存在したのかを推定する事が困難であるため、断片の間の欠落を補っていない。5 行目に在証される *[kal]ñene* は上で言及した accent rule I が適用されていない形式である。

a 裏

- 1 /// (-) [m]. /// /// sa  
 2 /// --. [ñ]. [lñ](e)[šše] - [ko te n]o /// /// ñ c(e)<sub>u</sub> \ {-} . [y]. šg  
 3 /// -- [la] --. [au]. [ā] O - ... [aim] ñā - [ñ]ce [i] -- m[n]. /// /// [ln]e {-} . [c] \ . [y].  
     [tākau] - /// /// [t]ko [r]se š[s]e c. ñ<sup>ā</sup> \ [akle a - . [e] ñce  
 4 /// pā nt. -- [s]. {-} - [twe yā] --- ... --- /// /// [-] - {-} [p]y. . [e] šše wārksa(l) ///  
     /// sa ñke lka lñā k. -- . [ā] šañ<sup>ā</sup> \  
 5 /// [y]. ... -- {-} - [ñ]e /// /// [c]. [šc] \ - /// /// - l[kal]ñene [t]o - lke  
 6 /// pā - {-} [ñam]. - . [e]. [e] ... - /// /// šek ka klaut(k)e[s]e[p]i  
 7 /// .(.)i /// /// ..e . [e]. em . (.)e

## 7: その他の断片について

本節では、写本における位置づけ及び他断片との関係も明らかでない断片を紹介する。ここで紹介する断片は大部分がかなり小さいものであるため、和訳は提示しない。また、注釈についても必要最小限の部分についてのみ与えている。なお、断片は THT の番号に従って配列している。

THT1202

fig.a [w: 4; h: 2.2cm]

a

- 1 /// - ///  
 2 /// nne tanmāššann(e) ///

b

- 1 /// O [tt]. ///

2 /// lašša 49 y(.)ā ///

3 /// O [y]ä[r].. ///

3 /// .(.)[ā] [r].(.)[ā] ///

frg.c [w: 4.5; h: 1.9cm]

a

1 /// .[ñ]. {-} [c]. - ///

2 /// ce<sub>u</sub>\ krentä šaiššeme(m) ///

b

1 /// piš yakne yšelme[š]š. ///

2 /// - r.o r[š]. .(.)i ///

frg.e [w: 4; h: 3.1cm]

a

1 /// añmā ///

2 /// - te k<sub>u</sub>se wa [m].. ///

3 /// r[sats]i 2 š[pa] ///

b

1 /// [o]stm(em) tr(i)kā[ts](i)<sup>[1]</sup> ///

2 /// - še šūkesa ///

3 /// .š. pe --- ///

[注釈]

(1): この形式はこれまで指摘されていないが、筆者の推定が正しいならば、語根 *trik-* ‘to go astray’ の不定詞である。

frg.g [w: 3.4; h: 2.9cm]

a

1 /// ñem su [c]. ///

2 /// - cāmpyāñ s[n]ai tra[ñk](o) ///

3 /// [p]e ///

b

1 /// [ñ]. .[n]. ///

2 /// ka laklesa † - ///

3 /// (ka)[l]yaṅak[a] ///

frg.i [w: 2.3; h: 3.1cm]

a

1 /// [c]c. [t]n. ///

2 /// - <sub>u</sub>\ ec[c]e ///

3 /// - [s](.)o ///

b

1 /// c. ///

2 /// c[e] ya[pa] ///

3 /// la ///

THT1203.frg.i [w: 3.2; h: 1.7cm]

a

5 /// -- st<sub>1</sub> - || ///

6 /// .ompek<sub>1</sub>\ šami ///

b

1 /// k[e] † 1 k<sub>u</sub>se ksa - ///

2 /// .(.)o {-} .(.)[e] .(.)[ai] - ///

THT1205.frg.i [w: 2.8; h: 3.9cm]

a

1 /// - [ñ](ä)kcyā

b

1 /// - šarya -

2 /// *rrātar*<sub>1</sub><sup>[1]</sup> *su*3 /// *igñ pācer*4 /// *.o śa .ā*2 /// *p[r]eke*<sup>[2]</sup> 193 /// *ke ste mā*4 /// *- [śātr]e*

[注釈]

(1): この *akṣara* の様式は他の断片に見られるものとは異なっている。残存部分からは、一般的に使用される <rra> の上に、さらに基字の上に附される <r> が附されたような字形となっており、一見すると <rrra> のように見える。この写本を書写した者が <rra> の正確な書き方を認識していなかったか、或いはより明示的に基字 <ra> に <r> が附された事を示すために採った方法かも知れない。

(2): 後続する *akṣara* からは *preke* ‘time, occasion’ が期待されるが、この *akṣara* は <pre> とは読めない。基字 <pa> の下に ligature として diacritic が見られるが、<r> とは方向が逆で、恰も <pa> に diacritic の <e> と <u> を附したように見える。

THT1210 [w: 5.5; h: 7.5cm]

a

1 /// *[snai] keś kodyanma retke o*2 /// *- cceṃ mari lāñcā wratso*3 /// *- nta tāśśam*<sup>[1]</sup> *peṣe*4 /// *[s]ā ś wairuriṣṣeṃ spha*5 /// *nne* 46 *yl[ai]ñā*6 /// *h[va]sur indri*

b

1 /// *sk[e] aiṣyeṃ we*2 /// *- naisa* 473 /// *ntañ*<sub>1</sub> *yāltse*4 /// *yāltse pokaintsa*<sup>[2]</sup>5 /// *p(e)kwem śeśutkoś*<sub>2</sub><sup>d</sup>6 /// *[mā]skoś laksaññana mā*

[注釈]

(1): この語形は hapax であり、正確な解釈はできないが、形態論からは *tāś* ‘commander’ の複数斜格と解釈する余地はある。或いは *tāśśam* の誤写と見做すべきかも知れない。

(2): この *akṣara* には *virāma* が附されている。この語形は *poko*\* ‘arm’ の複数通格であり、ここから、従来知られていなかった複数斜格が *pokaim*\* である事を確認する事ができる。

THT1215

frg. a [w: 4.9; h: 2.9cm]

a

1 /// *sk. {---}*2 /// *ñās śaiṣse ce † pudñā*3 /// *- [tś]ālpāwa tśalp.*

b

1 /// *- ll[e] tumpa k<sub>u</sub>se ai*2 /// *- ceṃ † tasemane ce<sub>u</sub>*3 /// *- .i*<sup>[1]</sup> *- {---}*

[注釈]

(1): (y)i 或いは (ñ)i と推定される。

frg.b [w: 3.7; h: 2.8cm]

- |  |                          |
|--|--------------------------|
| a  | b                        |
| 1 /// p. [r]tt. ram no ///               | 1 /// - {-} - ///        |
| 2 /// .[y](a)kn(e) nta tve šotri [e] /// | 2 /// s[ru]kalñentse /// |
| 3 /// .o ///                             | 3 /// 12 mā ///          |

frg.d [w: 5.9; h: 1.6cm]

- |   |   |
|---|---|
| a                                       | b   |
| 1 /// -- na yāsna preñca po [c](p)ī /// | 1 /// .[s]. - v(ai)śravaṇi so <sub>i</sub> 12 /// |
| 2 /// - {-} - ///                       |   |

THT1216 [w: 12; h: 4.4cm]

- a
- 3 /// ---
- 4 /// - t. ru s. c. nts p. - {-----} alyek cmelne
- 5 /// (pu)[d]ñ(ā)kt[e] weña † waip̄te waip̄te t. - nts[o] ko weña k̄a
- 6 /// [ai]śamñesa astreṃt[s]a [n]o mā śap̄\ yān no cmela
- b
- 1 /// - .r. aiśśam̄ † mānt ra śaum[o]nts(e) kw[ī]pe somp̄āstra † epya
- 2 /// (ta)rk[n](a)nne tañ maimā krentā † kra[k]e[n]e no yamaśanne
- 3 /// - .i no y[n]āñ(m). - {- - -} (o)r[k]amñe ce<sub>u</sub> sru
- 4 /// mā --

THT1228 [w: 9.1; h: 7.3cm]

- a
- 1 {- - -} .s. cārka pes<sup>[1]</sup> naumiy(e)nt[a] - ltsi [t]. ///
- 2 {- -} klyantsa yolaimn wāntreśc kai yno ysu<sup>[2]</sup> ś[l]e - ///
- 3 {- - -} rsa ce<sub>u</sub> O empelye 4 ///
- 4 {- -} [ra]mt akenā<sup>[3]</sup> O em̄twe .au {-} - ///
- 5 {- -} - kāre aškār k̄lantsañi pap(e)k. ///
- 6 {- - -} [ts]eṃ uppāṣi piltā ṣ ram no śa[nts]. ///
- b
- 1 {- - -} [r]nta ptarkasome māḷastra mapi - ///
- 2 {- -} [au]ntsate mcuške ṇano aitsi [āyo](r) ///
- 3 {- -} [e]ru p̄alsko O nemce .ś. .cp. ///
- 4 {- - -} sa O te mānt weña p[r]o ///

5 {--} - *stsa kekenu ce<sub>u</sub> stām ñor ñwes<sup>[4]</sup> ñke [l]yś. ///*

6 {---} - *kāre weña mant (t)ākam l(ā)re [p]o ///*

[注釈]

- (1): この語は hapax であるが、*pest* ‘away’ の variant と思われる。Peyrot (2008: 67) に指摘されるように、絶対語末の -Ct > -C となる変化は一般的に Late Tocharian B の特徴とされており、筆者の解釈が正しいならば、全ての用例が必ずしも Late Tocharian B の特徴とは言えない事となるが、この断片の用例は -st + n- > -s + n- という特定の環境で生じた同化現象と解釈すべきと思われる。
- (2): この三つの akṣara の切り方は不明である。
- (3): 先行する語の読みが正しいならば、この語形は *āke* ‘end’ の複数形で、Classical Tocharian B では *akenta* として在証される語形である。ここから、この語形には accent rule I が適用されていない事が窺え、Peyrot (2008: 223) による当該断片の arch.-II への帰属は arch.-I に修正される可能性を指摘する事ができる。他の断片の用例も合わせて考えるならば、この写本全体が言語特徴の点から arch.-I を含むものに分類されるべきである。
- (4): この語形も hapax であり、文脈からこの形式を一つの語として認定する事には問題がないと思われるが、現在のトカラ語文献学の知識では解釈できない。形容詞 *ñuwe* ‘new’ に関係づける解釈が考えられるが、形容詞には語尾 -s は知られていない<sup>12</sup>。

THT1242.frg.b [w: 3.8; h: 2.9cm]

a

1 /// *ssu 48 k<sub>u</sub>se n[o] ///*

2 /// *pāl(sk)o pe - ///*

b

1 /// - *ek(a)[ñ]ñ(e) ///*

2 /// *.(ra)m no = mpālsko ke ///*

THT1266 [w: 8.8; h: 2.4cm]

a

1 *lwāsane tarrek tanmā[s](t)[ra] ///*

2 *nt alyenqantsa wārpnatṛa om su ///*

3 -- {---} *lanṇaṣṣam [k](.)e ///*

b

4 {-----} -<sup>[1]</sup> ///

5 *[ṣa]ly. [e]nn. ‡ samāññene .e ///*

6 *pelaikne mant empreṃ lk[āṣa](m) ///*

[注釈]

- (1): 基字は <wa>・<la>・<nda> のいずれかと考えられる。

THT1275 [w: 7.7; h: 4.1cm]

a

<sup>12</sup> Late Tocharian B の特徴として複数属格語尾 -mts > -ts > -s という音変化が知られており (cf. Peyrot 2008: 69, 84-88)、この解釈をこの断片で適用する考え方もある。即ち、この写本に属する THT1296a3: *aiśaumyets* は -mts > -ts という変化を示しており、ここから -ts > -s への変化が進行していた可能性を排除する事はできないからである。

- 3                    /// – ///  
 4    /// *lm[au] na stw(āra) [y](ā)lts[e] ñ. ///*  
 5    /// – *m[e]ṃ nirmānarati<sup>[1]</sup> y(ñ)āk[t]eṃ ñä[k]t[e] ///*  
 6    /// *[sše]meṃ ‡ mārñākten[ts]e ///*

b

- 1    /// *(śa)śāyormem laitam su {---} -- ///*  
 2    /// *(we)[ś]eñai taḡalñe śuk(e)sa wa(r)[ñai] ///*  
 3    /// *[a]ptsarnta yamṅne c[p]ī o ///*  
 4                    /// *[ta] ///*

[注釈]

(1): B525b7 に推定される (*nirmāṇa*)*ratine* から再建される *nirmāṇarati*\* の variant と解釈されるが、B527b7 には (*nirmāna*)*ratine* のように、舌端音の -n- を有する形式を推定すべきかも知れない。

THT1276 [w: 5.3; h: 4.4cm]

a

- 1    /// *m[e] y. ś(a)k w(i) p. ///*  
 2    /// *r.[e]ṃ ‡ klautkās(k)eṃ ///*  
 3    /// – *śau<sub>1</sub> śā -- ///*  
 4    /// *śāmnamṣā ke -- ///*

b

- 1    /// *u<sub>1</sub> traike wrocce -- ///*  
 2    /// *(uppā)[l]<sub>(1)</sub> yokam [ś]au(m)o [m]e ///*  
 3    /// – ‡ *yan no -- ///*  
 4    /// *tañ[w]amṃ no [ka] śa ///*

THT1340.frg.b [w: 11.5; h: 5.2cm]

a

- 1    /// *wās[te] tu ksa nai laklene mā neśa[nn]. {---}*  
 2    /// *[t]s m[ā] tarśauna ‡ prākre no śap<sub>1</sub> yolaitṣ maīyy[a] – [m]śga*  
 3    /// – – 3 *waike ñake [e]mp(r)eṃṣñempa [v]āi<sup>[1]</sup> yamast[ra] –*  
 4    /// *tsi śpā ñā s(.)ai {–} – {–} .ālyauce ‡ .ai {---}*

b

- 2    /// – c. *tṣ<sub>1</sub> [k]w. .[ñ]. {-----}*  
 3    /// – ñ<sub>1</sub> *neśāñ mā k. – k. tar̄ya ymainne .nu – ñ<sub>(1)</sub> {–}*  
 4    /// – ‡ *lkaskau<sup>[2]</sup> atkwa<sub>1</sub> tañ<sub>1</sub> cāmpamñe k<sub>1</sub>loṣ attsaik p(e)s[ī]<sub>1</sub>*  
 5    /// *[ta] ‡ taññe yakne maṃntanta ñaś<sub>1</sub> eñk[w] ā [r].. [l](.)e .[ai] (–)*  
 6    /// *ñca[t](s)<sub>1</sub> śpā ceṃt[s]<sub>1</sub> ña[ś]<sub>1</sub> [ā]rtau ‡ 8 || wai .[e] {---}*

[注釈]

(1): 最初の akṣara の基字は <ca> 或いは <da> と読めるかも知れず、解釈できない。

(2): 定動詞 *lkāskau* の arch.-I の語形である。

## THT1394

frg.a [w: 3.8; h: 1.8cm]<sup>13</sup>

a

1 /// .(.)e r.(.) pa pa kā

b

6 /// - t[ai] le ksai

frg.g [w: 3; h: 1.9cm]

a

1 /// - .n. (.)[s]. .k. ///

2 /// (pe)laikne we[ñ](a) ///

b

1 /// kts. aikne † - ///

2 /// .(.)ai {-} [ñ](.)e ///

frg.h [w: 2.6; h: 1.9cm]

a

1 /// - ///

2 /// (.)[ñ]. ya nma kly. ///

3 /// .(.)ā [l](.). .(.)[o] ///

b

1 /// - ///

2 /// star klyaus(ts)i e ///

3 /// - ///

frg.r [w: 3.1; h: 2cm]

a

1 ca pudñā(kt)e ///

2 - .(.)ā [s](.)i ///

b

5 {-} tk. tw. - ///

6 knesa ta - ///

frg.s [w: 3.4; h: 2.5cm]

a

1 /// - {-} - ///

2 /// ol pā .(.)i ///

b

1 /// - ///

2 /// - [t]u ms. ///

3 /// .(.)[e t]umem tā - ///

frg.u [w: 1.9; h: 2.4cm]

a

1 /// - 23 s. ///

b

5 /// .l. ///

6 /// - rnai sañ ///

frg.v [w: 3.1; h: 1cm]

a

b

<sup>13</sup> この断片の当該写本への帰属は暫定的である。

6 sm. t<sub>g</sub> 39 – ///

1 [r]ñe ret[k]e mā ///

frg.bb [w: 2.9; h: 2cm]

a

1 /// ś(a)kenn(e) t. ///

2 /// .(.)e śam tom[ś]<sup>a</sup> ///

b

1 /// – [c]. mpa – ///

2 /// – [sy]a te ya ///

frg.hh [w: 5.4; h: 4cm]

a

1 /// – {–} r<sub>1</sub> śwātsi yo[kts]i ///

2 /// nmasa yākne postam [y]. ///

3 /// .(.)[olm]emśc<sup>[1]</sup> so ///

b

3 /// (.)[w]y. ///

4 /// (lā)[kl](e)ñ srukalle [lā](kle) ///

5 /// – ñ [c]e ikene 59 [k]. ///

6 /// – wat nai pāce(r)<sub>1</sub> ///

[注釈]

(1): Toch.B *onolme* ‘creature’の向格である(*on*)*olmeśc* 或いは(*wn*)*olmeśc* が推定される。

THT1399

frg.q [w: 3.5; h: 1.2m]

a

6 /// kā ra – [s]<sub>1</sub> ///

b

1 /// [s]<sub>1</sub> .(.)i .(.)i ///

frg.r [w: 5; h: 2.4cm]

a

1 /// p.ā wā laklesā hiṃ<sup>[1]</sup> ra – ///

2 /// [la]rya ///

b

1 /// [l]<sub>1</sub> [c](ā)ñcr(em) kly[au]śts[i] ///

2 /// (ce)<sub>u</sub> pr(e)kesa keṃtsamts [walo] ///

[注釈]

(1): 荻原 (2012: 190-191) で指摘した THT2995b2 にも *hiṃ* が在証され、その際筆者は *rohiṇi* ‘the constellation Taurus’の斜格である *rohiṇiṃ* の書き誤りと推定した。この断片にもこの語形が確認されるため、この *hiṃ* は書き誤りではなく、一語と見做すべきかも知れない。ただし、この断片では後続する部分の解釈が不明であり、後続する部分と一つの語を形成し、必ずしも *hiṃ* と解釈すべき必要はないかも知れず、今後の調査に俟ちたい。

frg.aa [w: 3.6; h: 1.2cm]

a

1 /// – {–} – ///

2 /// m[y]e re – ///

b

1 /// wts[e] ñ. kā [n]tr. ///

2 /// .[au] .[ā] ///



frg.ee [w: 3; h: 2.5cm]

a

1 /// [l](a)rya pācer w. .[l]. ///

2 /// [l](.) .ṣ[l]e ya – ///

b

1 /// [ś](<sub>l</sub>) lāre so(y) ///

2 /// – śne tsāka ///

frg.uu [w: 3; h: 2.1cm]

a

5 /// – ṣṣ. – ///

6 /// (sru)k[e]lle ne s(.)e ///

b

1 /// [stre]sa kaun ya(ṣi) ///

2 /// .(.)e .(.)ai ///

frg.ww [w: 2.7; h: 1.9cm]

a

1 /// – ta[r] sā<sub>u</sub> \ ///

2 /// – ///

b

1 /// .ś. – <sub>u</sub>(<sub>l</sub>) ///2 /// [tar] \ † ke .e ///

THT2183 [w: 4.9; h: 1.6cm]

a

5 -- .[w]. --- ///

6 rtai tsa ne<sup>[1]</sup> l[na]skem ṣa ///

b

1 nenem pākri māskentṛa ///

2 {---} .[i] {-} .e ///

[注釈]

(1): この部分の語の切り方は不明である。

THT3195 [w: 2.1; h: 2.6cm]

a

1 /// – .[ñ]. ///

2 /// (yo)laina yā(mornta) ///

3 /// 31 .e ///

b

1 /// .[ñ]. ñ \ – ///

2 /// [s]trā ṣe[k] ṣe(k) ///

3 /// [s]oyä ///

## 8: 『出家功德経』写本に反映される言語について

第二節で言及したように、Peyrot (2008: 223) は当該写本に属する断片の内、THT1324.frg.a を arch.-I に、また THT1228 を arch.-II に分類しているが、各断片の注釈で指摘したように、arch.-I の特徴を示す語形が他にも見られた。また、写本に見られる Archaic Tocharian B の特徴の内、顕著に見られるものは、Peyrot (op.cit.: 39-41) が arch.-II と見做す accent rule II の不適用である事も確かであるが、この写本には Classical Tocharian B の特徴も確認される。

一方、この写本の書写に利用されたブラーフミー文字が Standard に分類される点も考慮に入れるならば、この写本は Archaic Tocharian B の時代に作成され、後代に書写されたものと推定するのが妥当と思われる<sup>14</sup>。

### 9: 漢訳仏典との関係について

先に見たように、本稿で扱った写本の冒頭に収録されたと推定される仏典は、『出家功德経』に比定された。トカラ語仏典は一般的に広義の説一切有部の仏典に比定されるが、この仏典はこれまで説一切有部の仏典であるとは指摘されていない。当該仏典の部派帰属は現時点では不明だが、仮に説一切有部の仏典ではないとすれば、トカラ仏教が異なる部派の仏典も訳していた事となり、その実態について研究する上で重要な示唆を含んでいると言える。また、既に言及したように、この仏典は漢訳にのみ現存しているが、『開元釈教録』巻2, 4, 13 にはこの仏典について以下のような記載が見られる。

「出家功德経(今有兩本一是秦譯附於秦錄一從賢愚抄出今附別生錄中)」

(T.55, no. 2154, 489c15)

「右二十部六十五卷。並是見入藏經。似是秦時譯出(數本經中並有秦言之字)諸失譯錄並未曾載。今附此秦錄。庶免遺漏焉。」

(T.55, no. 2154, 519a4-6)

「出家功德経一卷

失譯(今附三秦錄拾遺編入)

(右出家功德経有三本流行餘二雖有廣略並從賢愚抄出云佛在王舍城迦蘭陀竹園中說今並載別生錄中此本佛在毘舍離國為梨車子鞞羅羨那說其中復云鞞羅羨那秦言勇軍雖不知譯人姓名必是秦朝譯也。)

(T.55, no. 2154, 617c14-16)

上に引用した『開元釈教録』によれば、『出家功德経』は東晋時代の後秦(384-417年)の頃に漢訳されたと推定されるが、この時代は Peyrot (2008: 204-206) によって 4-5 世紀と推定される Archaic Tocharian B の時代とも一致している。この写本の言語には Archaic Tocharian B が反映されている点から見て、オリジナルとなった写本はより古い時代の成立であり、漢

<sup>14</sup> ただし、このように Archaic Tocharian B と Classical Tocharian B を含む写本の言語相をどのように解釈するかという点はより深く検討されるべきであろう。即ち、言語特徴が Archaic Tocharian B の特徴を含む一方で、書写に用いられたブラーフミー文字が Archaic ではなく Standard に分類される場合、従来は後代のコピーであると考えられてきた。上で示した当該写本に対する判断もこの見方に基づくものである。しかしながら、荻原 (2013) で明らかにしたように、キジル石窟に残る arch-1 の特徴を含む題記は最も古い時期のブラーフミー文字ではなく、Archaic と称される、Standard 以前の時期のものによって書かれていた。題記が何らかのオリジナルに基づいて何度も石窟の壁に書かれる性質のものではない点を考慮に入れると、言語特徴とブラーフミー文字の断代及び両者相互の関係は、更に詳細に検討される必要がある。ここから、Archaic Tocharian B と Classical Tocharian B の特徴を含む写本が実際の言語相を反映していた可能性も考えなければならず、当該写本についても、Archaic Tocharian B と Classical Tocharian B を含むトカラ語 B を Standard に分類されるブラーフミー文字で書写したものか、或いは上で推定したように、より古い時期の写本の後代のコピーであるのか、より慎重に考察すべきであると思われるが、現時点では資料が圧倒的に不足しているため、議論の余地が残されている点のみ指摘しておきたい。

訳年代も考慮に入れると、『出家功德経』を含むこれらの仏典は、インドより齎された後それ程時間が経たない時期にトカラ語に訳されたと考えられる。この点は、トカラ仏教が当時のインド仏教と密接な関係を持っていた事を示すと同時に、中国で漢訳された仏典が、ほぼ同じ時期に中央アジアでも受容されていた事を示しており、中央アジア仏教史だけでなく、中国仏教史を中央アジア仏教との関係から考える上でも重要である。

## 結論

本稿では、『出家功德経』を冒頭に置く仏教写本を扱った。筆者が扱った断片からは、当該写本は韻文で綴られていたと推定されるだけでなく、収められた仏典毎に韻文の韻律が異なっていたと考えられる。この文体から考えて、当初 Archaic Tocharian B で作成されたと推定されるこの写本は、トカラ仏教が古層の段階でかなり高度な文学技法を有しており、これらの技法を駆使してインドから伝えられた仏典を翻訳していた事を示している。

また、漢訳仏典中には『出家功德経』は単行経典として収録されているため、本稿で扱ったトカラ語 B 写本は、トカラ仏教において複数の仏典を集めて編纂された独自の仏典である可能性が高い。トカラ仏教の古層において、どのような仏典が、どのように翻訳されたのかという点については依然として不明な点が多いため、『出家功德経』の比定はこの問題の解決に対して手がかりを提供するものと言える。『出家功德経』は漢訳された時代が経録から窺う事ができ、その年代はこのトカラ語 B 写本のオリジナルの写本の年代とも近く、トカラ仏教はインドから伝えられた当該仏典を、早い段階で翻訳していた可能性を指摘する事ができる。

一方、現存する資料には Archaic Tocharian B で書かれた断片がある程度存在しているが、全体から見れば量は少なく、また残存状況も他の時期に較べて良好とは言えないものが大半を占める。しかしながら、本稿で行ったように、同一写本への帰属や他の断片との接合を明らかにする事ができれば、ある程度は言語学的研究に利用可能なコーパスを得る事ができる。本稿の例で言えば、当該写本中の THT1324.frg.a が arch.-I に、また THT1228 が arch.-II に分類される点が指摘されていたが、この二断片だけでなく同一写本に属する他の断片も含めて全体的に見た場合、この写本に関しては arch.-I 及び arch.-II の区別は適用されず、両者を含んだ広義の Archaic Tocharian B が反映されていると見做すべきであると指摘する事ができる。ただし、その一方で Classical Tocharian B の特徴も見られる事を考慮すれば、この写本は Archaic Tocharian B の時代に作成され、後代に書写されたものと推定される。このように、個々の断片レベルで見ただけでは見えなかった言語相が、写本全体を検討する事でより明らかとなる事が窺える。

中央アジア出土のその他の文献言語と比較して、トカラ語文献は状態が悪いだけでなく総数も少ないため、言語学的・文献学的研究には困難を伴うが、今後も本稿で行ったような作業を継続する必要がある。

参考文献

- Adams, Douglas Q. (2013) *A Dictionary of Tocharian B, revised and greatly enlarged*. Amsterdam - New York: Rodopi.
- Ching Chao-jung (2010) *Secular documents in Tocharian: Buddhist economy and society in the Kucha region*. Unpublished doctoral dissertation, EPHE.
- Malzahn, Melanie (2007) The Most Archaic Manuscripts of Tocharian B and the Varieties of the Tocharian B Language. In: Melanie Malzahn (ed.), *Instrumenta Tocharica*. Heidelberg: Winter, 255-297.
- Malzahn, Melanie (2010) *The Tocharian verbal system*. Leiden: Brill.
- 荻原裕敏 (2012) 「トカラ語 B の『Avadāna 写本』断片について」『東京大学言語学論集』(TULiP) 32: 109-243.
- 荻原裕敏 (2013) 「略論龜茲石窟現存古代期龜茲語題記」『敦煌吐魯番研究』第十三卷: 371-386.
- Peyrot, Michaël (2008) *Variation and Change in Tocharian B*. Amsterdam: Rodopi.
- Peyrot, Michaël (2013) *The Tocharian Subjunctive*. Leiden: Brill.
- Pinault, Georges-Jean (2008) *Chrestomathie tokharienne. Textes et grammaire*. Leuven-Paris: Peeters.
- Stumpf, Peter (1971) *Der Gebrauch der Demonstrativ-Pronomina im Tocharischen*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- SWTF I = Waldschmidt, Ernst et al. (1973) *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden [und der kanonischen Literatur der Sarvāstivāda-Schule]*. Begonnen von Ernst Waldschmidt. Im Auftrage der Akademie der Wissenschaften zu Göttingen. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- T. = 『大正新脩大藏經』
- Thomas, Werner (1983) *Tocharische Sprachreste: Sprache B. Teil I: Die Texte. Band I: Fragmente Nr. 1-116 der Berliner Sammlung. Neubearb. und mit einem Kommentar nebst Register versehen von Werner Thomas*. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.

[追記]

筆者は昨年「阿含經典に関連する三点のトカラ語 B 断片について」と題する論文を『東京大学言語学論集』34 (<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/bulletin/#54>)で公表した。当該論文の17-24頁で論じたように、トカラ語B断片THT1550は«Māndhātāvadāna»に比定されるが、その後の調査でトカラ語A断片A182及びA183も*mürdhāgate*に言及している事に気付いた。この両断片は非常に小さな断片であり、内容を確定する事はできないが、今後の研究に資するため«Māndhātāvadāna»に比定される可能性を指摘しておきたい。

## Fragments of The “*Chujia Gongde Jing*” in Tocharian B

OGIHARA Hirotoši

Keywords: Tocharian Buddhism, the “*Chujia gongde jing*”, Archaic Tocharian B

### Abstract

In this paper, 46 Tocharian B fragments kept in the Berlin collection will be introduced which could belong to one and the same manuscript. Except for the quotation of some sentences or verbal forms, most of them have been left unpublished. The following two criteria, [1]: paleography of the Brāhmī script and [2]: the size, the usage of horizontal rules, and the spacing between them, will be used to decide which fragments should belong to this manuscript. As far as I could identify, this manuscript can be reconstructed as follows:

[Fragments of which content or the position in the manuscript was identified]

THT: 1305 + 1324a {folio 2}; 1278 {folio 5}; 1215c + 1324b {folio 55}; 1171 {folio 56(?)}  
1213 + 1224; 1296 + 1399hh + 1612

[Unidentified]

THT: 1202a, c, e, g, i, 1203i, 1205i, 1210, 1215a, b, d, 1216, 1228, 1242b, 1266, 1275, 1276,  
1340d, 1394(a), g, h, r, s, u, v, bb, hh, 1399q, r, aa, ee, uu, ww, 2183, 3195

The Brāhmī script used to copy this manuscript can be classified to the standard stage paleographically in spite that the linguistic features show Archaic Tocharian B, a fact which suggests that the manuscripts would have been copied by the scribe whose linguistic features show more advanced Tocharian B than the original text which he copied.

On the other hand, the comparison with the Chinese texts leads to the identification of the first work of this manuscript (THT1305 + 1324a) as the *Chujia gongde jing* 出家功德経 “Sūtra on the merits of leaving the house” (T.16, no. 707) thus far known only in Chinese, although other fragments still remain unidentified. This identification will contribute to the researches on which works had been translated into Tocharian B in the archaic stage of this language.

(おぎはら・ひろとし 中国人民大学国学院)